

ISSN 0914-8760

臨床リウマチ

Clinical Rheumatology
and Related Research

Vol.33/No.1



日本臨床リウマチ学会

誌 説

臨床リウマチ学会誌この1年で注目された投稿論文
—2019年度臨床リウマチ学会誌掲載論文を振り返って—

松野リウマチ整形外科
日本臨床リウマチ学会誌編集委員長
松野博明

はじめに

2019年度も臨床リウマチ学会誌には多数の優れた論文が掲載されました。これもひとえに常日頃から本誌を愛し、投稿を続けてきて頂いた先生方のご尽力の賜と編集委員会を代表して心より厚く御礼申し上げます。日本臨床リウマチ学会誌は、リウマチ学に関連した査読のある日本語投稿可能な数少ない医学誌として今後も発展を続けていく所存です。どうか今後とも引き続き本誌に多数の投稿をお願い致します。

ところで先生方に投稿をお願いしておきながら、残念ながら掲載不採用とさせて頂いた論文も増えて参りました。現在、本誌の採択率はこの数年おおよそ70%であり、誌面の都合があるとはいうものの約3割の先生方には不愉快な思いをさせてしまったことについては、大変心苦しく心よりお詫びしたいと思います。ただし編集委員会としては、可能な限り公平中立に一つ一つの論文を丁寧に査読させて頂き、採否を判定しているつもりですので、もし不採択となった先生もどうかこれに懲りずにまた別の論文を投稿頂ければ幸甚です。以前と比べ論文の採択率は低下していますが、その分論文の質は年々向上しているように思います。そのためか複数の論文において様々な会社から論文の転載

依頼が増えてきています。先生方が執筆された論文が多くメディアで紹介されることは嬉しいことと感じている今日この頃です。

今年度も例年にならい2編の優秀論文が編集委員会による厳正な投票により選ばれ、副賞である賞金と合わせて表彰させて頂くことになりました。受賞された先生方、本当におめでとうございました。また今後も年間の優秀論文賞の選定を継続していく予定です。これからも先生方からの投稿を心よりお待ち申し上げております。また学会賞に選定された論文以外にも、多くの優れた論文が今年度も本誌に掲載されました。今回選定された論文ならびにその他の注目すべき論文を簡単に紹介させて頂き、先生方の日常診療のお役に立てて頂きたいと思っております。

表彰論文

大村知史先生の“高齢者の要介護状態に見られる関節リウマチの影響—HAQを低値に抑えることが要介護状態の回避につながる—”¹⁾では関節リウマチ(RA)は要支援・要介護認定患者が一般人口より高いことを調査立証され、要介護度合いとこれに関連すると考えられる幾つかのRA患者の背景因子を検討されました。その結果要介護度にはHAQ(Health Assessment Questionnaire)が最も寄与していることを明ら

Notable articles of the Journal of Clinical Rheumatology in 2021

Hiroaki Matsuno.

Matsuno Clinic for rheumatic diseases

Editorial Committee Chairman of the journal of clinical rheumatology and related research

DOI: 10.14961/cra.33.1

かにされました。従ってRAを診療する医師はHAQを0.75未満に抑えることがRA患者の要介護状態になることの回避につながることをつきとめられました。あらためて日々の診療においてHAQの増加を抑えることの重要性を証明されました。

近藤正宏先生の“専門医不在地区における病診連携によるRA診療”²⁾では地域における専門医とかかりつけ医の役割分担を検討され、専門医が診断・治療法の選択などを行い、かかりつけ医が副作用のチェックやDMARDの用量調節などを行うことで、その後どうなるかを調査されました。その結果、こうした役割分担をした地域連携がRAの早期発見や重篤な感染症発症抑制につながるということが明らかになり、RAにおいて病診連携がいかに重要であることを示されました。

その他の注目すべき原著論文

香川英俊先生の“関節リウマチ患者の紹介状況から考える理想の地域連携”³⁾では地域における勉強会を通じ専門医とかかりつけ医が紹介と逆紹介を繰り返すことで、かかりつけ医の経験患者数を増やすことができること、またかかりつけ医が経験を積むことで地域全体の医療レベルの底上げにつながることを報告されました。

平野裕司先生の“実臨床における関節リウマチのトシリズマブ治療—併用メトトレキサートとプレドニゾロン減量・中止と大関節破壊抑制効果に注目して—”⁴⁾ではトシリズマブ(TCZ)を2年間継続治療した患者を検討し、この間に併用薬のメトトレキサート(MTX)を減量しても疾患活動性は低下または維持されていることを示され、さらにMTXを減量しても関節破壊は抑制されていることを明らかにされました。TCZはMTXの依存性が低い薬剤であることは知られていますが、実臨床では治療中に何らかの理由によりMTXの継続投与が困難な場合もあるかと思いますが、今回示された結果は、TCZ治療中であればMTXを減量や中止しても関節破壊抑制効果が維持されていることから興味深い結果と思われま

す。長谷川絵里子先生の“イグランチモドの腎機能に与える影響”⁵⁾ではNSAIDとして開発されCOX阻害作用のあるイグランチモド(IGU)は理論的には腎・糸球体血流低下につながる可能性があることから自件例による腎機能の評価をされました。その結果、中止により腎機能は回復するもののNSAID併用例においてIGUで腎機能が低下することがあることを報告され、IGU治療中の腎障害に留意する必要があることを示されました。

Yoshii Ichiro先生の論文“Divergence between rheumatoid arthritis patient and rheumatologist: From data of questionnaire research.”⁶⁾では多施設共同研究によりRA医とRA患者にアンケート調査を行い、患者がRA医である主治医に何を求めRA医はそれに対してどのように意識し応えているかを調査されました。その結果RA患者はRA医による合併症も含めた治療を望んでいるばかりか、たとえ入院しても主治医であるRA医に診てもらいたいと希望していることが明らかになりました。このことからRA医と患者の間には他の疾病以上に強いラポールが形成されていることが示唆されました。さらに驚いたことに看取りまでRA医にしてもらうことを希望している患者がいることが調査結果から示されました。

元村拓先生の論文“関節リウマチ患者における長期の骨密度変化”⁷⁾では10年以上経過しベースラインとの骨密度データとの比較が可能であった症例を解析し、RA骨粗鬆症に影響を与える因子を解析されました。その結果、薬物では骨吸収抑制薬が骨密度増加に寄与し、ステロイドは骨密度低下を誘導していることがわかりました。また生物学的製剤は骨密度に影響を与えていないとの見解も示されRA治療において骨粗鬆症にも気を配るべきであることを指摘されました。

ほかにも数多くのいずれ劣らぬ優れた論文が2019年度の日本臨床リウマチ学会誌に掲載されましたが、誌面の都合もあり割愛させていただきます。どうか興味のある先生はバックナンバーから検索して論文をチェックしてみてください。

誌上ワークショップから

臨床リウマチ学会誌は不定期に誌上ワークショップとして会員の先生方に依頼原稿をお願いしています。本年度も多数の原稿をお願いし、多くの先生方から玉稿を賜りました。執筆頂いた先生方本当に有り難うございました。特に本誌Vol31, No1 p41-84に掲載させて頂いた“リウマチ性類縁5疾患の最新知識”の誌上ワークショップでは、RA医であれば知っておかねばならないRS3PE症候群・リウマチ性多発筋痛症・IgG4関連疾患・家族性地中海熱・キャスルマン病の5疾患について、折口智樹先生・中村正先生・高橋裕樹先生・右田清志先生・新納宏昭先生に分かりやすく解説して頂いています。どうか会員の先生にはご一読頂きたく思います。

さ い ご に

本年度も多岐にわたる内容で多数の興味深い臨床研究論文を掲載することが出来ました。また誌面の都合で、この場では皆様に具体的にお伝えすることは出来ませんが示唆に富む多数のケースレポートも投稿頂きました。今後とも本誌発展のためケースレポート・臨床研究問わず多数の論文が投稿されること編集委員一同心よりお待ちしております。

参 考 文 献

- 1) 大村知史, 福田互, 柳田拓也, 他: 高齢者の要介護状態に見られる関節リウマチの影響—HAQを低値に抑えることが要介護状態の回避につながる—。臨床リウマチ, 31: 15-23, 2019.
- 2) 近藤正宏, 村川洋子, 森山繭子, 他: 専門医不在地区における病診連携によるRA診療。臨床リウマチ, 31: 195-203, 2019.
- 3) 香川英俊, 山中龍太郎, 玉城雅史, 他: 関節リウマチ患者の紹介状況から考える理想の地域連携。臨床リウマチ, 31: 275-284, 2019.
- 4) 平野裕司, 紀平大介: 実臨床における関節リウマチのトシリズマブ治療—併用メトトレキサートとプレドニゾロン減量・中止と大関節破壊抑制効果に注目して—。臨床リウマチ, 31: 24-32, 2019.
- 5) 長谷川絵里子, 小林大介, 伊藤聡, 他: イグラチモドの腎機能に与える影響。臨床リウマチ, 31: 145-154, 2019.
- 6) Yoshii I, Kondo M, Nishimoto N, et al: Divergence between rheumatoid arthritis patient and rheumatologist: From data of questionnaire research. Clin Rheumatol Rel Res 31: 104-111, 2019.
- 7) 元村拓, 松下功, 平岩利仁, 他: 関節リウマチ患者における長期の骨密度変化。臨床リウマチ, 31: 98-103, 2019.

編 集 委 員

松野博明(編集委員長), 亀田秀人(東邦大学医学部内科学講座膠原病学分野), 菅野祐幸(信州大学医学部病理組織学講座), 佐藤慎二(東海大学医学部内科学系リウマチ内科学), 田中栄(東京大学医学部整形外科学教室), 中島亜矢子(三重大学病院リウマチ・膠原病センター), 中原英子(大阪行岡医療大学医療学部 行岡病院内科), 西田圭一郎(岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 整形外科), 藤尾圭志(東京大学医学部アレルギー・リウマチ内科), 堀内孝彦(九州大学病院別府病院免疫・血液・代謝内科), 松下功(金沢医科大学リハビリテーション医学科), 森雅亮(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科生涯免疫難病学講座), 敬称略